

# 関東大震災を訪ねる



# 関東大震災を歩く

現在の東京は大震災の記憶などまったく失ったかのように見えます。しかし、まぎれもなくこの東京で起こった出来事であることを伝えるものは意外にも数多く見つけることができるのです。いつもと違う視点で街を歩いてみましょう。その土地に眠る記憶がよみがえってくることでしょう。



『関東大震災を歩く』の著者である、武村先生にご紹介いただいた場所を掲載しています。写真も交えながらご覧ください。



未来を担う子どもたちに優れた環境を。

● 元町公園 / 旧元町小学校

震災の猛火を伝える黒焦げイチョウが残る

● 湯島聖堂

焼け跡で1本だけ残った震災復興のシンボル

● 大手町震災いちょう

幾度も災害を受け止めてきた大仏様。今は顔だけのお姿に

● 上野大仏

震災後の住宅不足を補った近代的アパートメント

● 同潤会上野下アパート

震災で焼失。日本で初めて鉄筋コンクリート造で建立された社殿

● 御徒町公園

復興に向けた住民の努力を伝える記念碑

住民が火災から守りぬいた街

● 神田佐久間町・神田和泉町



遊女たちの非業の最期  
今も香華が絶えない

●新吉原花園池跡

言問通り

大イチョウによって  
守られた観音堂

●浅草寺

隅田公園

言問橋

水戸街道



火から逃げ惑う人々で混乱を  
極めた「第二の被服廠跡」

●横川橋

災害を疑似体験して、  
防災行動力を高めよう

●本所防災館

隅田川

最大の惨劇が起きた被服廠跡  
今は静かな慰霊の場

●横網町公園

震災犠牲者の御遺骨が  
納められた慰霊堂  
東京都慰霊堂

錦糸公園

両国駅

京葉道路

明暦の大火の無縁仏を弔い、  
その後の江戸・東京の  
災害犠牲者を供養する

●回向院



浜町公園

火災でも落橋せず  
「人助け橋」と呼ばれた

●新大橋

# 横川橋

東京都墨田区横川1丁目1番1号

## 火から逃げ惑う人々で混乱を極めた ひふくしょうあと 「第二の被服廠跡」



大横川は江戸時代の初期につくられた運河で、物流の大動脈でした。現在は埋め立てられて、親水公園として整備されています。この大横川を春日通りが渡るところが横川橋で、現在の橋は震災復興事業で架橋されたものです。

横川橋のたもとは、近隣の町会などによって1934(昭和9)年に建てられた慰霊碑があります。碑文には、「当横川橋畔は本区に於ける第二の被服廠として橋脚隧道に橋下の船中に老幼相扶け父子相擁して歿死せるもの実に三千六百有余人に及び其の惨状言語に絶す」とあり、大変な惨状であったことがわかります。

この本の序章で松本ノブの手記をご紹介します。ノブは夫の鶴吉とこの橋で別れ、後に遺品から鶴吉が亡くなったのがこの橋であったことを知ります。手記の中でも橋のたもとの混乱ぶりや翌日に見た惨状が克明に描かれています。その一節をご紹介します。

地震翌日、ノブは子どもを知りあいに預け、行方不明の夫を探して横川橋まで戻って来ていました。

「…横川橋迄行ってみますと、此の時は身体中の血が一時に頭へ上るかと思う程驚きました。橋のたもとから橋の上のあの広場には、幾千人の焼死体が山になっているではありませんか。川の中は焼け落ちた木片でいっぱいになっているかと思えば、死体で水が見えないではありませんか。何で驚かずに居られましょう。何で悲しまずにいられましょう。ああ此の幾千もの人々が一時に焼き殺されるだんまつまの有様は!? 此の人々の死ぬ時の思いは? と思うと、暫くは呆然として其の生臭い死がいの山の中につっ立っていました…」

武村雅之著「手記で読む関東大震災」古今書院(2005)より



橋のたもとに立つ慰霊碑



現在の横川橋(震災復興事業のひとつ)

# 東京都慰霊堂

東京都墨田区横網2丁目3番地25号(東京都横網町公園内)

震災犠牲者の御遺骨が  
納められた慰霊堂



東京都慰霊堂



関東大震災で最も大きな被害を生じた被服廠跡の一部は現在、横網町公園となっています。その中に東京都慰霊堂があります。

慰霊堂は、震災の犠牲者5万8千人の遺骨を納めるための霊堂として、1930(昭和5)年に建てられました。その建築費は一般からの寄付でまかなわれました。

当初は「震災記念堂」と名付けられましたが、のちに1945(昭和20)年の東京大空襲などによる戦災犠牲者(約10万5千人)の遺骨も合ごう祀され、名称も「東京都慰霊堂」と改められました。

現在でも、関東大震災が起きた9月1日と、東京大空襲があった3月10日に、慰霊祭が執り行われています。

三重塔をいただいた荘厳な堂宇<sup>どうう</sup>は、築地本願寺や神田明神を手掛けた建築家・伊東忠太による設計で、どの宗教宗派にもよらない独特の雰囲気をかもし出しています。堂内には、震災の惨状を伝える絵画や写真など貴重な資料が展示されています。



東京都慰霊堂の内部

# 横網町公園

東京都墨田区横網2丁目3番地25号

## 最大の惨劇が起きた被服廠跡 今は静かな慰霊の場



横網町公園から両国国技館、江戸東京博物館にかけての地域は、震災当時、陸軍被服廠跡と呼ばれていました。被服廠とは、軍帽・軍服など兵士の身の回り品をつくる工場です。工場は震災の4年前に赤羽に移転していて、二万坪(6.6万㎡)にも及ぶ広大な空き地となっていました。

火から逃れ、ここに集まった人々は約4万人。そのほとんどが亡くなる大惨事となりました。惨劇の場は臨時の火葬場となり、周辺の犠牲者も含め約5万体が荼毘に付されました。多くは露天で火葬され、高さ10尺(3m)の白骨の山が築かれたといえます。

### 朝鮮人犠牲者追悼碑



震災直後の流言飛語が原因で犠牲になった朝鮮の人々を祀る慰霊碑。

説明板には「震災の混乱のなかで、あやまった策動と流言飛語のため六千余名にのぼる朝鮮人が尊い生命を奪われました」と書かれています。

例年9月1日に東京都慰霊堂で追悼慰霊祭が行われる横で、朝鮮人犠牲者追悼式が執り行われています。そこにはもうひとつの関東大震災があるのです。

### 震災遭難児童弔魂像

犠牲になった東京市の小学校児童、約5千人の慰霊のために、全市小学校校長会が建立した記念像。

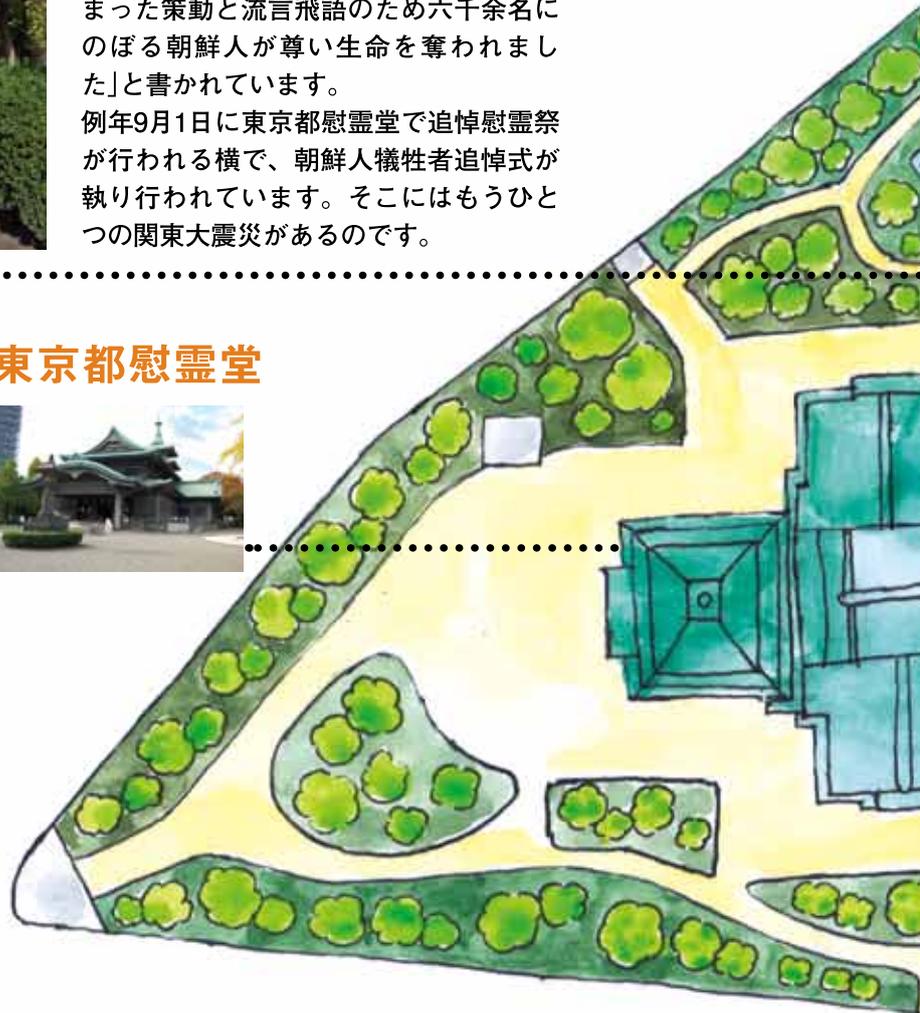
彫塑家・小倉右一郎による「悲しみの群像」と題された像は、青銅製で、少年少女がいたわり合いながら猛火を遠望している姿を描いています。

あまりに写実的で素晴らしい作品であったために、愛児を失った親たちに見せるのは残酷と、非難の声さえ上がったといえます。

記念像は戦時中の金属供出によって撤去され、現在の像は小倉右一郎の弟子によって、往時の姿を模して再建されたものです。



### 東京都慰霊堂



## 永田青嵐句碑

震災当時の東京市長、永田秀次郎の句。俳人でもあり、号は青嵐。「焼けて直ぐ 芽ぐむちからや 棕櫚の露」



## 復興記念館

関東大震災に関する資料を保存・展示するため、1931(昭和6)年に開館しました。震災被害を伝える資料が多数展示されているほか、震災を描いた油絵等を見ることができます。

また、帝都復興展覧会に出品された精巧な都市模型など震災復興の様子を伝える資料も並んでいます。

戦後、東京大空襲による戦災関係資料も合わせて展示されるようになり、名称も「震災復興記念館」から「東京都復興記念館」に変わり、現在に至っています。



## 幽冥鐘と鐘楼

震災当時の中国(中華民国)より送られた弔霊のための鐘。

「幽冥鐘一隻を鑄造して、これを日本の災区に送り長年に亘って撃撞し、この鐘声の功德によって永らく幽都の苦を免れしめん」として寄贈されました。

寄贈に先立ち、震災時の流言飛語による朝鮮人殺傷事件にからんで中国人も殺傷されたという報道が中国に伝わり、反日感情が高まる事態もありましたが、中国側の調査と日本の誠意ある対応により無事始撞式を迎えました。



# え ころ いん 回向院

東京都墨田区両国2丁目 8番10号

明暦の大火の無縁仏を弔い、  
その後の江戸・東京の災害犠牲者を供養する



江戸・東京は、火災、地震、水害に繰り返し見舞われてきました。回向院ではその災害の記憶をたどることができます。

浄土宗の寺院、回向院は、1657(明暦3)年の明暦の大火で亡くなった身元不明の人々を供養するために、当時の将軍徳川家綱が「万人塚」という無縁塔を設けたのがはじまりとされます。以来、火災や天災などによる多くの犠牲者を葬り、供養が行われてきました。

震災当時、万人塚の台座の上には本尊である阿弥陀如来像が鎮座しており、火災で堂宇どうういっさいが焼失する中、この像は焼け残りしました。江戸屈指の鋳物師・太田氏釜屋六右衛門(通称「釜六」)の初代の作と伝えられるこの銅像は現在、文化財に指定され本堂の中に納められています。

関東大震災による犠牲者の遺骨は基本的には震災記念堂へ納骨されましたが、東京市は遺族や縁者の希望に応じて、分骨の要望に応えました。1929(昭和4)年までに1万7千個の遺骨が分骨され、その多くが回向院に納骨されたといわれています。

万人塚のほかにも、理髪業者によって建てられた関東大震災の慰霊碑や、安政地震とその後起きた水害の慰霊碑、1783(天明3)年の浅間山の噴火に関連した慰霊碑などがあり、非業の死を遂げた人々への鎮魂の念を今に伝えています。



無縁塔「万人塚」と観音菩薩像(平成14年安置)



相生理髪業組合による関東大震災の慰霊碑

# 新大橋

中央区日本橋浜町2丁目 江東区新大橋1丁目

## 火災でも落橋せず 「人助け橋」と呼ばれた



隅田川に架かる橋の多くは、火災によって焼け落ち、永代橋や吾妻橋では多くの死者を出しました。そんな中であって、多くの人々の命を救い、震災後も長く使われ続けた橋があります。

「人助け橋」と呼ばれた新大橋です。この橋は当時すでに鋼鉄製でしたが、焼け残った理由はそれだけではありません。

橋の西詰には、高さ5mもある大きな避難記念碑が建っており、震災当時の様子や、石碑建立の由来が記されています。

震災時、この橋には火災に追われて深川方面から逃げてきた人々が、家財道具を持って押し寄せました。当時の深川区西平野警察署の橋本巡査部長は、人々の持つ荷物を危険と判断して、荷物を棄てるように言いました。しかし、非番で普段着だったために、市民はなかなか言う事を聞きません。橋本巡査部長は、久松警察署新大橋西詰派出所の警官らの協力を得て、抜剣までして次々に荷物を河へ投げ込みました。

避難者たちの中には、泣いてすぎる人や、余りに乱暴だと憤慨した人もいたそうですが、万人の命には代えられないと

断行したのです。

「<sup>びんしょう</sup>・<sup>まこと</sup>敏捷の果敢なる動作は寔に時宜を得たる処置なりき」と碑文に刻まれている、橋本巡査部長のとっさの判断と行動は、冷静さと勇気がなければ成し得なかったことでしょう。

この一警察官の機転によって市民が身軽になった結果、橋に避難していた1万有余の避難者の命と、水天宮、小鯛稻荷神社、<sup>げんやだな</sup>玄治店<sup>たちばな</sup>橋神社の三つの御神体は、難を逃れることができたのです。

現在の橋は1977(昭和52)年に架け替えられたもので、その主塔には震災当時の橋の姿を伝えるレリーフが架かっています。



橋のもとに立つ慰霊碑



現在の新大橋(昭和52年架橋)



慰霊碑横にある『人助け橋』のいわれ

# 大手町震災いちょう

東京都千代田区大手町1丁目(大手濠緑地内)

焼け跡で1本だけ残った  
震災復興のシンボル



一面の焼け野が原となった東京で、絶望の淵をさまよう人々に、最初の勇気を与えたもの、それは緑の生命力でした。

その一つが現在でも大切に保存されています。千代田区大手町の東京消防庁本部庁舎の前にある「震災いちょう」です。

このイチョウは当時の文部省の敷地(現在のパレスサイドビル付近)にあり、震災による火災の中、奇跡的に生き残り、復興の希望となった木でした。

その後の復興事業に伴う区画整理で切り倒されることになりましたが、当時の中央气象台(現在の気象庁)の台長・岡田武松がこれを惜しみ、なんとか後世に残したいと帝都復興局に申し出、現在地に移植されました。



お堀端に立つ震災いちょう

# 湯島聖堂

東京都文京区湯島1丁目4番25号

震災の猛火を伝える  
黒焦げイチョウが残る



湯島聖堂とは、五代将軍徳川綱吉が儒学の府として創建し、後に昌平坂学問所となり、明治以降、文部省や東京師範学校などが置かれたところ

です。湯島聖堂は関東大震災でほとんどの建物を焼失しました。震災復興で、孔子を祀る大成殿は鉄筋コンクリート造で再建され、その後の戦災では焼けず、現在もその姿をとどめています。

この大成殿の東側に並ぶイチョウには、大成殿側に多くの黒こげが残っています。戦災



幹の一部が黒く焦げているイチョウ

を受けていないことから、これは関東大震災で大成殿が炎上した時にできたものと考えるのが自然でしょう。

イチョウは枝葉が多く、生枝は水分に富んでいるため、燃えにくい性質があります。そのため震災や戦災で黒焦げになりながらも倒れず、今なお生き続けている木が都内各所に残っています。火災のすさまじさを直接知ることができる貴重な証拠です。

# 元町公園／旧元町小学校

東京都文京区本郷1丁目1番

未来を担う子どもたちに  
優れた環境を



元町公園



震災復興事業で建設された東京市立の小学校は117校にのぼります。耐震性・耐火性にすぐれた鉄筋コンクリート造が採用され、「復興小学校」と呼ばれました。このうち52校には校地に隣接して「復興小公園」が設けられました。

その当時の姿をよく伝えている例のひとつが元町公園と旧元町小学校です。公園には開園当時そのままに壁泉やカスケード(水階段)が残っています。小学校は現在移転していますが、建物は別用途に転用されて使われています。



旧元町小学校

復興小学校は震災復興のために造られたとはいえ、その設計は応急の対応策ではなく非常に高水準のものでした。避難のしやすさや生徒の健康や衛生に配慮され、デザイン的にも合理的で美しいものとなっています。

そこには、子どもたちに二度とつらい思いをさせたくないという願いや、科学や実学を重視する考え方が反映され、さらには学校を地域の核として広く住民を啓発し、近代的なまちづくりをめざそうとする思いが込められています。

## 今も活用される復興小学校

117の復興小学校のうち、現存しているのは15校。うち7校は今でも現役の小学校として、残り8校は別用途に転用されて利用されています。

	小学校	隣接する小公園	所在地
現役	九段小学校	東郷元帥記念公園	千代田区三番町
	常盤小学校	常盤公園	中央区日本橋本石町
	阪本小学校	坂本町公園	中央区日本橋兜町
	泰明小学校	数寄屋橋公園	中央区銀座
	城東小学校		中央区八重洲
	黒門小学校		台東区上野
	東浅草小学校	旧今戸公園	台東区東浅草
転用等	旧・十思小学校	十思公園	中央区日本橋小伝馬町
	旧・箱崎小学校	箱崎公園	中央区日本橋箱崎町
	旧・京華小学校		中央区八丁堀
	旧・愛宕高等学校		港区西新橋
	旧・元町小学校	元町公園	文京区本郷
	旧・下谷小学校		台東区東上野
	旧・柳北小学校	柳北公園	台東区浅草橋
	旧・小島小学校	小島公園	台東区小島



九段小学校



旧・十思小学校

# 神田明神

東京都千代田区外神田2丁目16番2号

震災で焼失。日本で初めて  
鉄筋コンクリート造で建立された社殿



境内の獅子山(平成2年再建)



鉄筋コンクリート造の社殿



神田祭で有名な神田明神は、1300年の歴史をもつ古社で、江戸時代には江戸総鎮守として崇敬され、現在でも神田、日本橋、秋葉原、大手町、丸の内など108町の総氏神です。

天明年間に造営された権現造りの社殿は、関東大震災で焼失しました。神職と氏子たちの「二度と燃えない社殿を」という強い願いによって、寺社仏閣は木造という常識を覆し、日本で初めて鉄筋コンクリート造で再建されました。権現造りを模しているので一見するとわかりませんが、高い耐震耐火性を備えた建物となり、これにより、戦災では焼失を免れ、近隣の被災者を収容する役割も果たしました。

また、本殿に向かって右側には石獅子があります。大きな石を積上げて、獅子の子落しを表したもので、親子の教育の在り方を説くものです。江戸後期につくられた獅子山は関東大震災で崩壊してしまいました。土や石

を積み重ねただけのもので、地震による強い揺れでひとたまりもなく崩れたものと思われます。同様に、練馬区の茅原浅間神社や渋谷区の鳩森八幡神社にあった富士塚(江戸時代、富士信仰のために造られたミニチュアの富士山)も崩壊した記録が残っています。現在の獅子山は1990(平成2)年に再建されたものです。

本殿の裏手に回ると、湯島聖堂と同様に焦げ痕が残るイチョウを2本見ることができるほか、男坂の石段近くにも黒こげのイチョウがあります。

## 日の出にかける復興への思い



この錦絵は安藤広重の『名所江戸百景』の1枚「神田明神曙之景」です。小高い丘にある神田明神から朝焼けの江戸市中を見渡す構図です。

この名所江戸百景が安政江戸地震の翌年から出版されたことや、江戸庶民にとって錦絵は報道メディアとしての役割があったことなどから、この絵は江戸の町の復興を伝え、日の出に象徴される再生力を描いたものではないかとする見方もあります。

# 神田佐久間町・神田和泉町

東京都千代田区神田和泉町1丁目

## 住民が火災から守りぬいた街



広大な焼失範囲の中に、ぽっかりと焼け残った場所がありました。その一つ、神田佐久間町と神田和泉町は、住民らが町に踏みとどまり、猛火から守り抜いた町です。

この一帯は江戸時代の火事でもその災いを免れたことがあり、それが住民の間で語り継がれていて、不焼の地という強い自負がありました。そのため、元気なものは避難せず、強い決意のもとで消火活動にあたりました。その様子を伝える碑が、和泉公園に残っています。

こうした住民の頑張りだけでなく、いくつかの幸運も手伝いました。周囲に耐火性の高い建築物があったこと、火が全ての方向から

一気に押し寄せず、時間差をもって襲来したことなどがあげられます。

住民の勇敢な姿勢は称賛に値すべきですが、町民全員が逃げ遅れた可能性もあり、地域の力を見極め、常に安全な避難路を確保したうえで活動することが肝要です。



防火守護地の碑(和泉公園)

# 御徒町公園

東京都台東区台東4丁目13番

## 復興に向けた 住民の努力を伝える記念碑



復興事業の中で市民に大きな影響を与えたのは、土地区画整理事業でした。その実現のためには、市民のもつ土地の1割程度をできるだけ平等な方法で提供してもらうことが必要でした。そこには多大な困難があったことは想像に難くありません。

御徒町公園には、その区画整理の完成記念碑がたっています。この地区では幹線第一号(現・昭和通り)、幹線第二十二号(現・蔵前橋通り)などの計画があり、新たな用地を多く生み出す必要がありました。住民代表である区画整理委員の多大な努力と住民の協力により、他の地域に率先して事業が完成しました。



区画整理完成の碑

# 同潤会上野下アパート

東京都台東区東上野5丁目4番

震災後の住宅不足を補った  
近代的なアパートメント



関東大震災の住宅復興のために財団法人同潤会が設立され、東京・横浜の16ヶ所で近代的な集合住宅が建設されました。このアパートには鉄筋コンクリート造が採用され、先進的な設計や装備が取り入れられました。

昭和初期には近代的だった建物も老朽化が進み、建て替えや取り壊しにより姿を消していきました。1929(昭和4)年竣工の上野下アパートは、80年以上経過した今でも現役で現存する最後の同潤会アパートです。

同潤会アパートのうち、青山アパートは、保存を訴える地域住民の声に応じて、外観を



同潤会上野下アパート(2013(平成25)年 取り壊し予定)

忠実に再現した「同潤館」として建て替えられ、表参道ヒルズの一部として商業施設に活用されています。

## 上野大仏

東京都台東区上野公園・池之端3丁目(上野恩賜公園内)

幾度も災害を受け止めてきた大仏様  
今は顔だけのお姿に



上野公園にはかつて大仏がありました。江戸・東京の災害を一身に受け止めてくださったかのように不運が続いた仏様です。

江戸初期の1631(寛永8)年、大仏さまは漆喰しっくいの釈迦如来像として建立されましたが、その16年後、地震で頭部が崩れ落ちてしまいました。浄財が集められて金銅仏として再興され、元禄年間には仏殿も建てられました。幕末に起きた火災で焼失してしまいます。その後修復されるも、安政江戸地震で頭部が落下。再度修復されましたが、関東大震災でも頭部が落下してしまいました。

その後解体され、寛永寺に保管されていま



上野大仏の頭部レリーフ

したが、戦中の金属供出でついに顔だけとなってしまいました。

顔だけになって“もうこれ以上落ちない”という縁起担ぎからか、現在では受験生が合格祈願に訪れるとか。

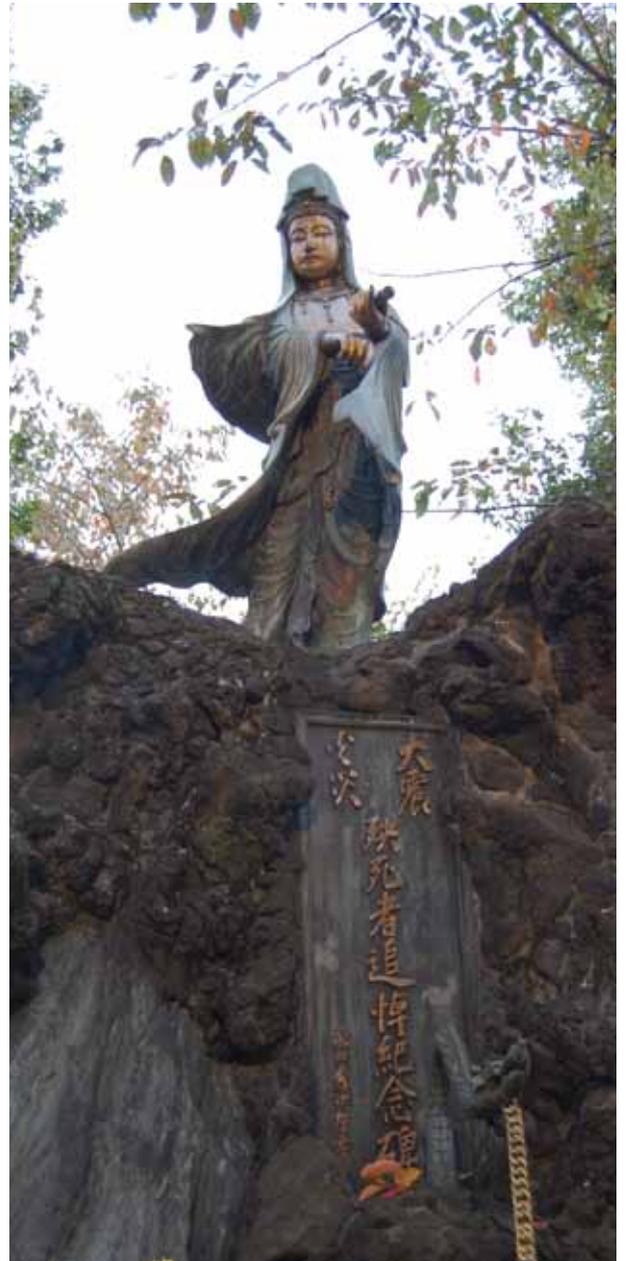
# 新吉原花園池跡

東京都台東区千束3丁目22番

遊女たちの非業の最期  
今も香華が絶えない



吉原弁財天(吉原神社奥宮)



追悼記念碑と観音像

 江戸幕府公認の吉原遊郭は日本橋にありましたが、明暦の大火を機に浅草寺裏に移され、新吉原と呼ばれました。明治になり芸娼妓解放令が出された後もその実態は江戸時代と変わらず遊女たちは自由に外出もできませんでした。

表玄関である吉原大門の反対側、遊廓街の裏手に公園がありました。100m四方の広さで、真ん中に花園池と呼ばれた大きな池があったといいます。

遊女たちは火から逃れようと、この公園に避難しましたが、周囲からも火災が迫り、進退窮まって次々と池に飛び込み、約400人が亡くなる惨事となりました。

現在、花園池はほとんど埋め立てられていますが、一部が吉原神社の奥宮に残っており、弁財天が祀られています。

多くの慰霊碑や記念碑が建っている中で、ひときわ目を引くのが追悼記念観音像です。吉原公園で亡くなった人々を供養するために

1926(大正15)年に建立されました。

観音像の前には大きな花束やお線香がたくさん捧げられており、今でも薄幸の女性たちへの哀悼の気持ちが生き続けていることがわかります。

## 第 2 節

# 関東大震災を読む

関東大震災は、日本の近代史の上で大きな出来事です。  
この震災をきっかけに、さまざまな目的で、多くの記録や言葉が残されました。  
その一部をご紹介します。

## 震災十周年記念塔



「不意の地震に不断の用意」

— 数寄屋橋震災十周年記念塔

台座の標語より—

数寄屋橋交番（中央区銀座4丁目）の後ろには、関東大震災の十周年を記念した塔が建っています。

この記念塔は1933(昭和8)年9月1日に、震災共同基金会によって建てられました。

記念塔の台座には「燈臺」と題された写実的な彫刻——獅子を従え、兜を装い、燈明を掲げた青年像——が、前方を見つめて立っています。この彫刻の作者は、長崎の平和記念像で有名な北村西望きたむらせいぼうです。

そして台座正面に「不意の地震に不断の用意」と刻まれています。

この標語は当時、朝日新聞社が一般から懸賞募集し、全国から寄せられた十万以上の中から選ばれたものです。

「不意の地震に不断の用意」——これは大災害を経験した人々の言葉であり、時代を超えてわたしたちに残された、防災の心構えの基本です。

# 震災予防調査会報告

「・・此等ノ報告ハ一言半句モ削減スルコトナク、如何ナル困難ヲ侵シテモ完璧トシテ出版シナクテハナラヌト固ク決心シタ次第デアル、斯クシテ本報告第百号ハ吾人ガ後世子孫ニ遺スニ足ルベキ唯一ノ大震災誌デ有リ得ルト思フデアル。」

—『震災予防調査会報告 第百号 - 甲』より—

地震国である日本は、1880(明治13)年に世界で初めて、地震学会を創立します。その後、濃尾地震(1891年)をきっかけに、文部省に震災予防調査会が設立され、ここを中心に地震災害を軽減するため、耐震構造・地盤震動・地震活動・地震予知などの調査研究が進められました。

震災予防調査会の研究報告をまとめた論文集の中で、関東大震災の被害や様相を、今に伝えてくれる資料があります。

それが『震災予防調査会報告 第百号』です。

関東大震災後、地震学者の今村明恒を筆頭に、中村清二・寺田寅彦・佐野利器などのメンバーが中心となった震災予防調査会によって、震災から一年半もの時間を費やして、地震編(甲)、地変及津波編(乙)、建築編(丙/上・下)、建築物以外の工作物編(丁)、火災編(戊)の5部門、計6冊にも及ぶ膨大な量の報告書がまとめられました。

地震学・地震工学・建築構造学・物理学など、それぞれの分野の専門家によって、徹底的に調査されたこの報告書は、現在、関東大震災を研究する上で非常に重要なデータです。また、この調査結果を基礎に、日本初の耐震基準が成立しました。

震災予防調査会の幹事を務めた今村は、著書『地震の国』の中で、『不忘の一点だけで天災を免れる場合は頗る多いが、反対に忘すこぶの一字の為に、免れ得べき天災を免れ得なかった実



震災予防調査会報告 第百号

例も亦また少なくはない』と述べおり、震災の記憶を風化させないことの重要性を指摘しています。

わたしたちが、関東大震災について詳しく知ることができるのは、大震災の記録を後世に伝えようと努力した人々がいたからなのです。



今村明恒(いまむら あきつね)

1870(明治3) - 1948(昭和23)

日本の地震学者。震災の18年前に東京に大地震が来れば死者10万～20万の大惨事になると警告。震災後は南海地震の地震予知などの研究の他、一般市民への、防災啓発に生涯をかけて取り組む。著書に『稲村の火の教え方について』『地震の国』など。

# 東大地震研究所記念プレート

「本所永遠の使命とする所は地震に関する諸現象の科学的研究と直接又は間接に地震に起因する災害の予防並に軽減方策の探求とである。この使命こそは本所の門に出入する者の日夜心肝に銘じて忘るべからざるものである。」  
—東大地震研究所開所十周年記念プレートより—

東京帝国大学の地震研究所は、関東大震災を契機として1925(大正14)年11月13日に設立されました。この施設の開所が、日本の近代地震学の出発点となります。現在、東京大学構内にある地震研究所一号館の玄関には、地震研究所開設に至った経緯を知ることの出来る、開所十周年の記念プレートが掲げられています。

このプレート文を刻んだのは、天災に関する警句を数多く残した、物理学者の寺田寅彦です。

寺田は早くから気象や地震の研究に組み、地震学に物理学を導入した先駆者とも言われています。関東大震災後も冷静な視線を失わず、科学者として震災の調査に当たりました。

随筆家でもあった寺田は、その随筆集の中で、自然災害に対してあまりにも脆い近代的設備や、それに頼りきって防災意識の低下している人々こそが「地震や津浪から災害を製造する原動力になる」と警告しています。

『科学の方則とは畢竟「自然の記憶の覚え書き」である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである。

それだからこそ、二十世紀の文明という空虚な名をたのんで、安政の昔の経験を馬鹿にした東京は大正十二年の地震で焼払われたのである。

こういう災害を防ぐには、人間の寿命を十倍か百倍に延ばすか、ただしは地震津浪の週期を十分の一か百分の一に縮めるかすればよ



東大地震研究所開所十周年記念プレート

い。(中略)しかしそれが出来ない相談であるとするれば、残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう。』

—『津浪と人間』より—



寺田寅彦(てらだ とらひこ)

1878(明治11) - 1935(昭和10)  
日本の物理学者・随筆家・俳人。関東大震災後に地震研究所で地震予防と防災の研究を進めた。科学と文学を調和させた随筆を多く残している。著書に『天災と国防』『柿の種』『津浪と人間』など。

# 永田秀次郎俳句

あきかぜ 秋風や 顔をそむけて ひとはず  
しかばね や 煙や秋の 江を隔つ

—永田 青嵐『震災雑詠』より—

永田秀次郎は震災時の東京市長として、震災直後の様々な処理やその後の東京市の復興に尽力した人物です。俳人でもあった永田は、市長として震災後の市中を見回りながら、そこで見た情景や感じたことを句に詠み、『震災雑詠』にまとめています。

中でも、9月6日に本所被服廠跡を訪れ、事態の深刻さを悟った時の様子は、克明に記されています。

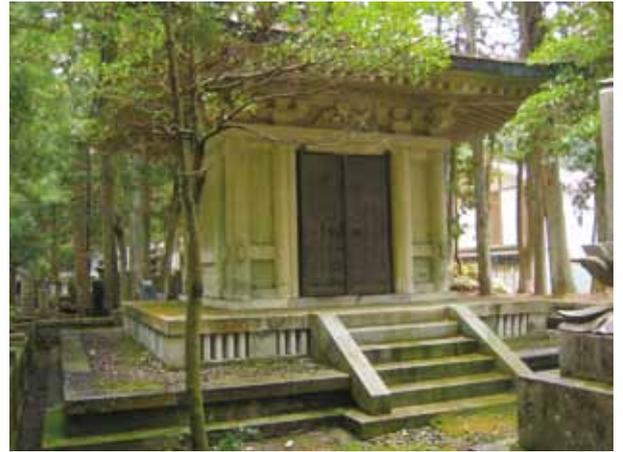
震災当時、本所被服廠跡で犠牲となった4万人近い人々の遺体は、名前が不明のまま火葬する処置を取りました。遺体の即時焼却を命じたのは、東京市長であった永田でした。

『私は最初衛生課の係員に対してなるべく死者の一人一人の遺物を残し、棺を作って之を入れる様に命じたのであったが実際の此光景を見ては逆も左様な迂闊な処置は出来ない。そこで止むを得ず涙を呑んで全部其場所火葬に附する事とした。火葬は成るべく夜中に執行せしめたのであるが、幾日とも無く其煙は隅田川を隔て、高く立ち上がって居た。』

—『震災雑詠』より—

市長としての立場から、このような決断をせざるを得なかったことに、深く思いを残していたのでしょう。

永田は東京市長として、震災の翌年、犠牲者の慰霊と、この災禍を記憶し後世に伝えるため、震災記念堂(現横網町公園の慰霊堂の前身)の建設事業を発起します。当初は資金不足



高野山奥の院の霊牌堂

で難航しながらも、国などの資金援助を得て、1926(大正15)年に財団法人としての認可があり、震災記念堂は伊東忠太の設計で建設されることになりました。

永田の震災犠牲者への哀悼の情は、こうした公的な事業にとどまりません。弘法大師の信仰の篤い淡路島出身の永田は、後に個人としての立場で、高野山奥の院に震災犠牲者の霊牌堂を建てています。

震災犠牲者約5万名の慰霊者名簿が納められた霊牌堂には、“一万年後にも残したい”という永田の深い慰霊の気持ちが込められています。



永田秀次郎(ながた ひでじろう)  
1876(明治9) - 1943(昭和18)  
後藤新平・東京市長の助役を務め、その後は東京市長として震災復興に尽力した。俳人でもあり号は永田青嵐。著書に『青嵐随筆』など。

# 手記

実際に被災した人々の個人の体験も、手記として残されています。最も被害のひどかった東京と横浜、それぞれの被災地で懸命に震災と向き合った二人の女性を紹介しましょう。

## 松本ノブ

月日のたつのは水の流れより早うございます。こうした恐ろしい悲しい月日もいつしか過ぎて、惨死者の一番多かった本所被服廠跡<sup>ひふくしょう</sup>や横川の岸辺には大きな供養塔が立てられ、仏教諸宗の出家方が集って大法会も営まれました。

—(中略)—

バラックの軒に冷たい雨の降る淋しい夕暮も、街路に砂塵を吹き卷く嵐の朝も、空澄み渡って月の光の青い夜も、私の頭から寸時も離れ得なかったのは夫の惨死を顧う<sup>おも</sup>悲しみと子供の将来を想う<sup>おも</sup>不安とでありました。

—(中略)—

私は此の時の自分の難儀と、人様から受けた御恩は生涯忘れる事は出来ません。及ばずながら受けた御恩の万分の一も返さなければならぬとは、片時も忘れる事はありません。然し<sup>しか</sup>子供はまだ幼年なれば、さ程に強く記憶に残らぬと思ひ、せめて其の時の有様のあらましなりとも子供に語り継いで、人様から受けた御恩に報ゆる様にして貰いたいとの願いから、当時の記憶をたどりつつこれを書いたのでございます。

武村雅之著「手記で読む関東大震災」古今書院(2005)より



### 松本ノブ(まつもとのぶ)

1895(明治28) - 1978(昭和53)

新潟県生まれ。義理の兄を頼って上京し、本所区横川町で魚屋を営む松本鶴吉と結婚。長男伊佐雄と長女静子をもうける。一家四人、自宅で関東大震災に遭遇する。震災で夫を亡くし、幼い子供たちにこの時の体験を伝えるため、手記を残す。

※2013年6月、手記の原本がご遺族より消防博物館に寄贈されました。

## 日高帝

当時私は、友人の紹介で横浜山下町のソ連の会社に勤めていました。周囲は中国、英国、インドなどの貿易商社が立ち並んでいて、夜ともなれば美しい音楽が聞こえてくる。隣には中国の財閥という感じの人が住んでいました。

9月1日、突然ゴーとすさまじい音に、飛び出した途端、地面は音を立てての土煙。転んでは立ち立っては転ぶの数分間で、手も足もコンクリートに擦って血だらけ。何が何だかさっぱり判らず茫然としている時、隣が火事だ！早く逃げろ！早く！と叫ぶ声。—(中略)— 公園は人、人、人。家屋の下敷きからやっと逃れてきて息をひきとる人、沢山の怪我人の老若男女。すでに公園の四方は火の海につつまれ、大小の地震は絶えず続く。水道の鉄管は破裂して一滴の飲み水もなく、火の粉をはらいながら一夜を明かす。—(中略)— 後ろ髪を引かれる思いで公園をあとにして、我が家のある伊勢原方面に向って歩き始めた。保土ヶ谷～戸塚で暗くなった。近くに神社は無いかとねぐらをさがしているとき、農家の奥様から声をかけられた。どうぞ私共にお泊り下さいとのお言葉に、<sup>ただ</sup>只涙でした。

武村雅之著「未曾有の大災害と地震学—関東大震災—」古今書院(2009)より



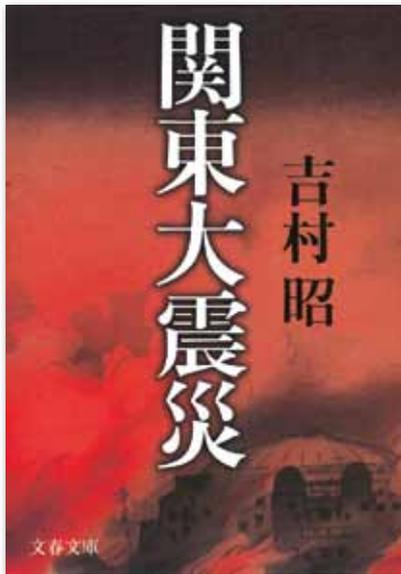
### 日高帝(ひだかてい)

1904(明治37) -

神奈川県伊勢原市出身。関東大震災当時は満19歳で、横浜市閩内の山下町にあったロシア商社に住み込みで働いていたところ、地震に遭遇する。震災時に救護活動を行い、後に神奈川県知事から表彰状が贈られた。

## 小説・随筆

文学の世界でも、関東大震災を題材にした作品が多く残されています。震災とそれに伴う社会の変化や人々の姿は、鋭い観察力と深い精神性を持つ作家たちの目にどのように映り、どのように描かれているでしょうか。ここで紹介する以外にも、芥川龍之介・若山牧水・鈴木三重吉などの著名な作家たちも、日記や著書の中で関東大震災に触れた文章を残しています。



吉村昭 著  
『関東大震災』  
(文春文庫)

菊池寛賞を受賞したノンフィクションの力作。関東大震災をトータルに、また克明に描き出している。現代への警句に満ちた印象的なシーンが連続し、その凄惨さが生々しく伝わる。

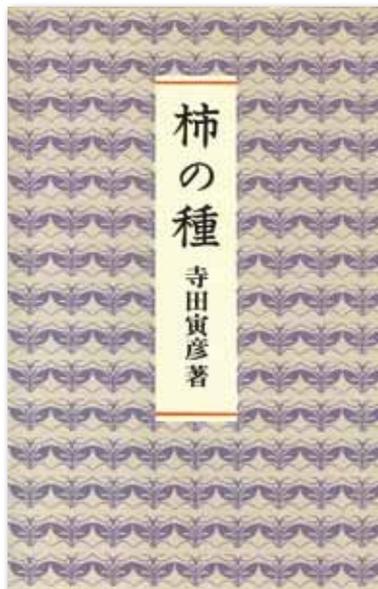
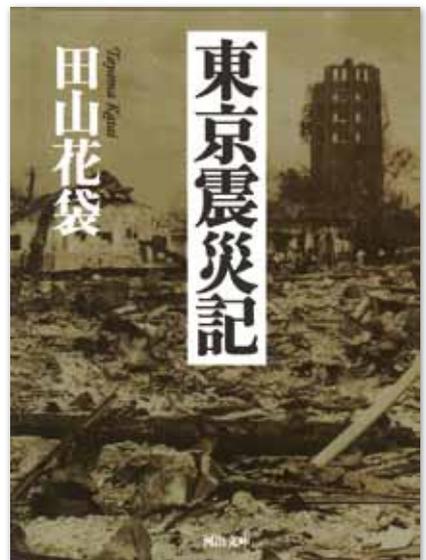
林 芙美子 著  
『放浪記』  
(新潮文庫)

第一次世界大戦後の困難な時代を背景に、一人の若い女性が飢えと貧困にあえぎ、職を転々としながらも向上心を失うことなく強く生きる姿を描く。関東大震災を機に大きく変貌をとげた東京の様相や風俗の描写も興味深い。



田山花袋 著  
『東京震災記』  
(河出文庫)

関東地震直後の東京の街を歩き回り、壊滅した市中で動揺する民衆の声を拾い集めたルポルタージュ。流言が飛び交い、混乱の中でゆがむ人間群像。人々はいかにしてこの大震災から立ち上がったのか。



寺田寅彦 著  
『柿の種』  
(岩波文庫)

物理学者であり随筆の名手としても知られる寺田寅彦の短文集。震災後の焼け跡の煙がまだ消えぬ頃、焦土に新しい息吹を発見し、廃墟に咲き出た名もない花に涙している。

本情報は、引用元である「関東大震災 1923年、東京は被災地だった  
発行：(公財)東京防災救急協会」作成時点での情報です。

そのため現在取り壊されたり、施設の都合により立ち入りができない場  
所もございます。

詳細は各施設にご確認ください。



